

[学術論文]

# 七月王政期におけるボルドーの貸本屋

—都市空間における貸本屋分析を通して—

Les cabinets de lecture à Bordeaux sous Monarchie de Juillet (1830-1848)

野 田(水 町) い お り

Iori (MIZUMACHI) NODA

---

*Studies in Humanities and Cultures*

---

No. 15

名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』抜刷 15号

2011年6月

**GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCES**

NAGOYA CITY UNIVERSITY

NAGOYA JAPAN

JUNE 2011

[学術論文]

## 七月王政期におけるボルドーの貸本屋

—都市空間における貸本屋分析を通して—

### Les cabinets de lecture à Bordeaux sous Monarchie de Juillet (1830-1848)

野田（水町） いおり

Noda (Mizumachi) Iori

はじめに

第1章 カタログにみられるボルドーの貸本屋

第2章 ボルドーの政治的指導者たちと貸本屋

第3章 ボルドーの教会と貸本屋

おわりに

**要旨** 本論文の目的は、自由主義思想を背景に成立し、ブルジョアの政権とも称されるフランス七月王政期に、ボルドーの貸本屋が、地域の教会や商業会議所、地方政治家たちと、いかなる関連を持ち、都市空間の中にもどのように位置づけられていたかを解明することである。ボルドーはフランス南西部に位置する港湾都市である。ボルドーには、自由闊達な独特の商人文化があり、パリとは異なるボルドー独自の都市空間が形成されていた。現在まで研究対象となることがほとんどなかったボルドーの貸本屋に焦点をあてることは、すでに都市空間での役割が検討されているパリの貸本屋との相違を明らかにし、貸本屋研究に新しい視座を提供する材料となりうるだろう。

パリの貸本屋が、最先端の知識の獲得が可能で、かつ公論の形成の場でもあり、しかも反体制的世論が形成される政治文化的公共性を内包していたことと比較すると、ボルドーの貸本屋は、体制順応型であるといえる。市民に初等教育を施していた教会との関係においては、その機能を補完する媒介者として、また、エリートたちとの関係においては、自由主義思想に基づいた政治の協力者として都市社会の中に位置づけられる。また、実用的な教育的書物を媒介として、エリートたちと市民をむすびつけ、都市全体を啓蒙する役割を果たしていた。そもそも、ボルドーの指導層自体が自由主義的であったため、七月王政期のボルドーの貸本屋は、保守的かつ啓蒙的な枠内ではあるが、指導者層の思索を伝達するための肯定的、積極的な役割を果たしている。つまり、七月王政期のボルドーの貸本屋は、都市における知の受容と伝播の拠点だったのである。

**キーワード**：貸本屋、ボルドー、都市空間、七月王政、教会、指導者、自由主義思想

## はじめに

都市の成立は、それ以前には交わることのなかった異なる階級、文化、思想を有する人々との出会いを可能にし、新たな関係を構築する機会となる。この関係性は、政治、経済、文化などの多くの機能を持った都市空間の発展に多大なる影響を与えている。本論文で扱う貸本屋は、階級や文化を超えて、多くの人々に出会いの場を提供してきた。

本稿の研究対象地域であるボルドーは、フランス南西部に位置するヨーロッパでも有数の港湾都市である。フランス内外から多くの人々が入り出し、首都パリとは異なる自由主義思想を基盤とした特徴ある都市空間が形成されていた。「ボルドーには自由主義思想を基盤とする自由闊達な文化と世論を作り出す歴史的土壌がある。文学や自然科学の世界と、商人の実務知識が融合した多彩で窮屈さを感じさせない商人文化が生まれ、そこに教会の影響力が加わってボルドー独特の文化は形成されている」<sup>1</sup>とされている。しばしば「ボルドーらしさ」という言葉で表現され、ボルドーで生活するあらゆる階級の人々に浸透していた自由闊達な文化はどのようにして生まれたのか。貸本屋とボルドーに住む人々との間にはいかなる関係があったのか。

そこで、本稿では、イギリスとの密接な歴史的関係性、自由主義思想、実利的な商人文化などの特性を有したボルドーの、都市空間における貸本屋の機能を検討し、貸本屋をボルドー社会の中に位置づけることを目的とする。中世以来、固有の伝統を持つ都市ボルドーの貸本屋の役割を見いだす試みは、既存の貸本屋研究に新しい視点を提供するだけでなく、個性豊かな地方文化の重層的な複合体であるフランスの姿を明らかにする材料にもなりうるだろう。

さて、本論に入る前に貸本屋の成立過程に触れておきたい。かつて、書籍は極めて高価で、一部の特権階級の人々のものであった。貴族たちは読書室をしつらえ、本に豪華な飾りをつけた。美しく装丁された本は、富の象徴として、貴族やブルジョアの邸宅を飾り、一般市民たちにはとうてい入手困難な贅沢品であった<sup>2</sup>。しかし、産業革命以降、余暇の出現、識字率の上昇、印刷技術の発展に加え、伝統的に「読み聞かせ」などが主流だった読書方法が「黙読」へと変わったことなどにより、読書は一般市民たちの文化的娯楽となった。高額な書物を購入できない民衆の読書への欲求をかなえるため、貸本屋は、18世紀後半に登場し、19世紀の初頭から中ごろにかけて、フランスのみならず、ヨーロッパ全土で大いに流行したのであった<sup>3</sup>。

ヨーロッパの貸本屋には二つの種類があり、フランス語ではキャビネ・ド・レクチュール（= cabinet de lecture）と、キャビネ・ド・ルエ（= cabinet de louer）とに区別されている。キャビネ・ド・レクチュールは、読書クラブとも訳され、本を貸し出すだけでなく、併設された読書室で、

<sup>1</sup> Charles Higounet, *Histoire de Bordeaux*, Toulouse, 1980, p. 196.

<sup>2</sup> 当時の書籍の一冊の価格は、人々の収入に対し、非常に高価で、一般市民の日当の3倍から5倍、現在の価格にすると、平均して1冊約3万円程度であるとされている（宮下志朗著『読書の首都パリ』、みすず書房、1996年、p. 196。）

<sup>3</sup> ロジェ・シャルティエ、グリエルモ・カヴァッロ編 田村毅共訳『読むことの歴史』（大修館書店、2000年）の第11章に貸本屋と読書クラブについての記載がある。

サロンのように、ゆっくりとコーヒーを飲みながら本を読み、時には本を媒介として、顧客どうし議論をすることもできた。たとえば、ウィーンのカフェは、読書クラブに分類される。一方、キャピネ・ド・ルエでは、本は貸し出されるだけで、読書クラブに見られる読書室や、喫茶店の併設などの組織的機能はない。一例をあげると、ロンドンのミューディ貸本屋（＝Mudie's）は、1842年に設立され、イギリス一の蔵書数と顧客を抱え、民衆の文化発展に大きく寄与した貸本屋であるが、貸し出しのみの営業形態を取っている<sup>4</sup>。そして、本稿が扱うボルドーの貸本屋はキャピネ・ド・ルエに属している。

次に、本論文で考察対象とした貸本屋についての主要な先行研究を整理しておこう。これまで、貸本屋の研究は、印刷、出版業などの経済流通システム上に、あるいは文化史上に位置づけられており、人々の生活と貸本屋の関連性が問題にされることは少なかった。たとえば、経済流通システム上の研究に関しては、エリザベス・アイゼンステインが『印刷革命』（みすず書房、1987年）の中で、貸本屋を「経済システム上の、書籍販売の変形した一つの形態」と定義している。貸本屋では、顧客が規定に沿ってあらかじめ賃料を支払い、本を借りる。たしかにアイゼンステインが言うように、借主と貸主の間には本の貸し借りによって料金が発生する経済上のシステムが成り立っている。貸本屋の文化的な側面については、すでに、パリの貸本屋が、市民たちに読書という娯楽を提供する場の一つであり、18世紀のカフェと同じように、市民たちが各自の興味・関心に応じて、仲間たちと議論を交わし、時には政治についても意見を交換し合うような公共圏を広げる場所であることが明らかにされている<sup>5</sup>。さらに、書物の歴史上に位置づけられた貸本屋の役割に関しては、リュシアン・フェーブとアンリ＝ジャン・マルタンが『書物の出現』（筑摩書房、1985年）で次のように述べている。「12世紀以降、書物は教会の独占的な文化であった。その後、大学が創設されたことで、世俗社会の教育体系が拡充し、社会と学問の変化につれて、書物の環境も変化した。それにより、修道院の外部に新しい学者や教師、学生などの知的読者層が誕生し、貸本屋は知的な読者たちの欲求を支えている」<sup>6</sup>。

しかし、以上のような議論は、商品交換により成り立つ経済システム上の領域と、文化の領域に切り離され、両者が関連性を持って研究されてはいない。貸本屋は、文化・知識の普及という書物が持つ本来の文化的役割と、出版・印刷・流通など、経済に関わる研究領域が相互に関連し、絡み合う場所である。したがって、文化的、社会的機能を持った都市空間において、その両方と密接に関わる貸本屋研究は、都市における書物を媒介とした知の受容と伝播を明らかにする上で、きわめて重要な研究と言える。しかしながら、現在までの貸本屋研究は、貸本屋が持つ文化的側

<sup>4</sup> ミューディ貸本屋やW.H.Smithなどのイギリスの貸本屋については、清水一嘉著『イギリスの貸本文化』（図書出版社、1994年）に詳しい記載がある。  
<sup>5</sup> 18世紀から19世紀におけるフランスの公共圏については、安藤隆穂著『フランス自由主義の成立—公共圏の思想史—』（名古屋大学出版局、2007年）に詳しい記載がある。  
<sup>6</sup> Lucien Febvre, Henri Jean Martin, *L'apparition du livre, L'Evolution de l'Humanité*, 1958.（関根素子他訳、『書物の出現』、筑摩書房、1985年、p.92）

面と経済的側面の連関も、その二つを相互に結びつける都市空間についても十分な考察がなされておらず、貸本屋を都市社会に位置づける研究は、今なお研究の余地を残している。

その中で、フランソワーズ・パラン＝ラルドゥール (=Françoise Parent-Lardeur) は新たな取り組みを行っている<sup>7</sup>。パランの研究は、貸本屋のカタログなどの一次資料を用い、パリ市内にある貸本屋の地理的考察を通して、パリの都市空間における貸本屋の役割を論じるものであり、貸本屋の既存の研究に新しい広がりを提供したと言える。しかし、パランの研究は、貸本屋の住所などの周辺情報から分かる地理的分析にとどまり、蔵書や営業目的などの貸本屋の内部に目を向けていない。さらに、ボルドーの貸本屋に関しては、先行研究がほとんどなく<sup>8</sup>、19世紀にはヨーロッパ中で見られた貸本屋が、ボルドー社会において、どのように機能し、どのような役割を果たしたかについては、ほとんど知られていないのが現状である。

ボルドーの自由主義は、ブルジョアの利益が優先されたパリの自由主義とは異なり、共和主義的であり、真の自由を望む思想の体系であったという。そこで本稿では、自由主義がもたらした共通の利害によって、商人、政治家、教会が結びついた過程を明らかにし、その三者と貸本屋がどのように関わりながらボルドーの特徴ある都市空間を形成したのかを中心に議論を進めていく。なお、貸本屋の資料については、貸本屋の顧客リストが現存しないため、貸本屋の利用者を明確に特定することは難しい。しかし、貸本屋のカタログだけでなく、貸本屋の営業許可申請書、商業会議所、アカデミー・ド・ボルドーなどの資料を補完的に用いながら顧客の推定を試み、すでに先行研究が見られるパリの貸本屋との差異化を図りたい。

<sup>7</sup> パランの研究に関しては、*Les demoiselles de magasin* (Paris, Editions Ouvrières, 1969) *Lire à Paris au temps de Balzac, les cabinets de lecture à Paris 1815-1830* (Paris, Éd. de l'E.H.E.S.S.1981), *Les Cabinets de lecture : la lecture publique à Paris sous la Restauration*, (Paris, Payot, 1982) などがある。

<sup>8</sup> Graham Falconer, *Autour d'un cabinet de lecture*, Toronto, Centre d'études du XIXe siècle, 2001 の第1章にボルドーの貸本屋についての記載がいくつかある。筆者が知りうる限り、ボルドーの貸本屋の研究は、これ以外にない。

## 第1章 カタログにみられるボルドーの貸本屋

第1章では、貸本屋のパフレットとカタログを用いて貸本屋の実態を明らかにし、その実態をもとに、ボルドーの都市空間において貸本屋が果たした役割について言及したい。

### 第1節 貸本屋の実態

#### (1) 貸本屋の所在地

まず、カタログに記載された住所から明らかになる事実を分析し、ボルドーの貸本屋の特徴について検討しよう。地図が示すように、ボルドーは城壁で囲まれた都市である。貸本屋の顧客と推定出来るのは城壁内に住む市民たちであり、城壁の外に住み、主にブドウ園で働く農業労働者たちは含まれていない。貸本屋①、②、④はカエルナン通りとサン・ジャム通りの間に位置している。カエルナン通りには、コレージュ・ド・ロワ、コレージュ・ド・ギュイエンヌなどの中等教育機関が

地図1 ボルドー市街と貸本屋



出典：Autour d'un Cabinet de Lecture, pp.185-271をもとに平松孝晋氏作成

あり、また、カエルナン通りから、一本西に入った通りには、ボルドー大学がある<sup>9</sup>。カエルナン通りから西をサンテロワ地区と呼ぶが、この地区は、パリの学生街であるカルチエ・ラタンに相当している。また、サン・ジャム通りには、書店と出版を兼ねたシモン・ミランジェというボルドーの老舗の本屋がある。これら①、②、④の三つの貸本屋は、学校や大学など、知的な書物の消費形態が確立された場所と、印刷・出版、書店など、書物の生産と販売に関わる場所の間に

<sup>9</sup> Ibid., p. 149.

設置されている。次に、貸本屋⑤は、ボルドーにおける商業の中心地アンタングス通りにあり、賑やかな商店街に店舗を構えている。また、貸本屋③は、トゥルニー通り沿いにあり、近くには、ボルドーで一番大きなトランペット公園がある。

住所から得られた貸本屋については、以下の考察が可能である。ボルドーの貸本屋の所在地は、知的消費に関連のある場所、賑やかな商業地区、公園の近くといった、3つの場所に大別できる。これは、パリの貸本屋の所在地の考察結果と全く同じ結果を示している。つまり、貸本屋は図書館のような無料読書サービスを提供する場ではないため、商業利益を優先した立地条件のもとに設置されているのである。また、ボルドーでは、表通りに裕福な人たちが住み、裏通りの小さな通りに一般市民が暮らしていたのだが、地図に示された貸本屋が全て大通りに面していることから、ボルドーの貸本屋は、比較的裕福な人々が住む場所に店を構えていたことも推測できる。

## (2) 貸本屋の営業形態

### 1. 営業時間

営業時間は、図書館の開館日や開館時間と比較して書かれている。カタログが発行された19世紀前半のボルドー市立図書館は開館時間が10時から12時まで、休憩を挟んで13時から14時までであり、かつ1週間に3回しか開かれなかった。利用者は一定の保証金を預けた後、図書館で本を読むのだが、館内読書のみで貸出はできず、昼間の限られた時間に本を読みに来るのは、地元貴族や大ブルジョアなど、自分たちで働かなくても、土地や港の使用料などの税金収入で暮らすことのできる有閑階級の人々ばかりであった<sup>10</sup>。したがって、ボルドーの貸本屋は、有閑階級の人々が中心に利用していた市立図書館よりも、幅広い階層からなるボルドー市民のニーズにあった営業時間と、営業日を設定することで、人々の文化的生活を支えていたと考えられる。

表1 ボルドーの貸本屋の営業時間

| 貸本屋名  | 営業時間               |
|---|--------------------|
| ① Chez J. B. Magen                            | 休息日（日曜日）以外は毎日営業    |
| ② Bibliothèque amusante morale et instructive | 朝8時から夕方5時まで（祝祭日は別） |
| ③ B. Castez                                   | 随時                 |
| ④ Nouveau cabinet de lecture                  | 記載なし               |
| ⑤ Panbiblion Bordelais                        | 図書館より、長時間営業        |

（出典：Autour d'un Cabinet de Lecture, pp.185-271をもとに筆者作成）

### 2. 貸出料金・貸出形態

ボルドーの貸本屋のカタログに示された貸出料金は、パリの貸本屋の金額と比べると安価であ

<sup>10</sup> Raymond Céleste, *Histoire de la bibliothèque de la ville de Bordeaux et documents de la Bibliothèque*, 1892.

る<sup>11</sup>。また、パリの貸本屋が1冊の本を3巻に分冊したり、貸し出し期間を短くするなどして過剰に経済利益をあげようとしているのに対し、ボルドーの貸本屋ではそのような営業方法はなされていない。たとえば、パリの貸本屋の貸し出し期間が平均して3日から5日であるのに対し、ボルドーの貸本屋では10日から12日の貸し出し期間があり、期間を過ぎると延滞料金を支払うシステムになっている。また、貸出形態を見てみると、ほとんどが定期的な使用を前提とした予約契約<sup>12</sup>で、契約期間は1か月、3か月、半年、1年の種類があり、契約期間に応じて会費が決まっている。また、ボルドーの貸本屋には、パリで多く見られた「店内での読書」「読書室会員」などの記載が認められない。

表2 貸本屋の営業目的と書籍分類

| 店名  | 営業目的   | 書籍の分類   |
|---|--|---|
| ①Chez J.B.Magen                             | 基本的に文学書を扱う店である。特に、古典作品が専門。男女問わず利用可。私たちの本屋は、信仰心のある本屋であり、小教区のすべての信者のためのものである。よって教育施設に分類出来るだろう。             | 基本的に文学書を扱う店である。特に、古典作品が専門。男女問わず利用可。著書名のアルファベット順。新刊紹介あり  |
| ②Bibliotèque amusante morale et instructive | 子どもに適した本を選んであげられる親は少ない。私たちはその手助けが出来る。子どもの教育するための親の指導書もある。当本屋は、家庭における「母親」の役割をするだろう。                       | 第1部：子どものための楽しい本（男子・女子ともに）<br>教訓物語、子どものお祭り、人間の身体について、芸術、自然のすばらしさ、動物の歴史、冒険記などに分類されている。<br>第2部：男女問わず、若者の教育的書物<br>天文学・植物学・狩り・化学・デッサン・寓話・地質学・体操・歴史・自然界の歴史・神学・文学・数学・道徳・音楽・神話・水泳・漁業・楽しい体育・物理学・宗教学・弁論術・技術・人生・旅行など、76の項目に分類してアルファベット順に並べている。<br>第3部：父、母、教育者、教授向けの本<br>教育科学・指導理論・教育方法（ゴルチエ式、ベスタロッチ式）・ジャコトット式理論（相互教育・講義・カリグラフィ・デッサン）・言語学 |
| ③B.Castez                                   | 第1部は役に立つ本を、第2部には楽しい本を揃えている。新刊はパリで発行された後、ボルドーの書店でも並べられるため、パリと人たちと同じ本が読める。                                 | 著書名によるアルファベット順。<br>第1部：歴史、哲学、論文、文学、旅行など<br>第2部：小説、詩、論文、短編小説、劇、雑文など  |
| ④Nouveau cabinet de lecture                 | 7月王政の規範に合わせて本を選択、分類している。   | 基本的には作家名で分類。分類されなかった本については、アルファベット順に並べている。  |
| ⑤Panbiblion Bordelais                       | 常時15000冊を揃えている。図書館並の品揃えであるが、早く閉まってしまう図書館より、人々の役に立てるはずである。古典作品だけでなく、19世紀の作品も多く取り扱っている。また、外国の作品の品揃えも豊富である。 | 専門分化したカテゴリーに分類し、その後、著者名毎に、アルファベット順に分類。各分野ごとに分かれ、記載された著作者数：218名<br><神学分野> 禁欲に関する本：10名 聖人伝：6名 聖職者の歴史：9名 神話・宗教の歴史：19名 判例集：14名<br><科学・芸術分野> 哲学・道徳に関する本：53名 教育学：12名 政治・法律 49名 国内経済：3名 軍事技法：22名 経済政策と統計：21名   |

(出典：Autour d'un Cabinet de Lecture, pp.185-271をもとに筆者作成)

<sup>11</sup> 1か月契約の料金を比較すると、パリの貸本屋は5フラン、ボルドーは3フランである。比較の対象として、一例を示すと、当時の労働者、たとえば馬車の御者の日当は1日3フランであった。(小田光雄著『ヨーロッパ本と書店の物語』平凡社、2004年)

<sup>12</sup> 予約契約とはフランス語のabonnementの訳である。利用者があらかじめ契約期間に沿って定額を納め、貸し出しをするシステムのことを指している。



### 3. 貸本屋の営業目的と蔵書

表2に示されたカタログ①から⑤の貸本屋の営業目的や書籍の分類を見てみると、ボルドーの貸本屋が、余暇を過ごすための娯楽施設でも、新聞を読んで議論を行うカフェや社交サロンのような場所でもないことが分かる。たとえば、カタログ①の「教会の小教区の教育施設に分類できる」や、カタログ②の「教育の指導書をそろえている」「教授、教育者のための本」などの記載は、貸本屋が教育的施設の様相を持ったものであるとの想定を可能にする。分類された書籍の内容も、古典作品から文学書、物理、技術ペスタロッチ式の教育理論まで幅広いが、少なくとも、娯楽的要素は見つからない。同様のことがカタログ③にも見られる。この貸本屋は「役に立つ本」と「楽しい本」に分けて貸し出しを行っているが、「楽しい本」でも、文学小説や詩、論文、演劇が中心で、いわゆる娯楽小説は置いていない。また、「役に立つ本」では歴史、哲学、論文、文学などを扱っており、実用的な教育書が主である。また、カタログ④の貸本屋で最も多くの書籍数を誇るのは、ボルドー出身の思想家モンテスキューで、その後にバルザック、ヴィクトル・ユゴーらが続いている。これらの小説は、パリの貸本屋で多く見られるような、文学的要素の乏しい単なる娯楽小説とは異なっている。カタログ⑤の貸本屋は、図書館並みの品ぞろえで営業し、政治、経済、聖書、判例集、歴史など15,000冊もの本を並べている。

以上のことから、ボルドー市内の貸本屋は教育的書物を扱っており、ボルドーにおける読書が実利的なものと結びついており、娯楽のための読書が提供されていないことが最大の特徴である。

#### 第2節 カタログの考察

カタログを検討した結果、ボルドーの人々にとって、貸本屋は、教育施設であり、公立図書館の代わりであると言えるだろう。カタログからは、パリの貸本屋で見られるような、娯楽の提供、過度の経済的利潤追求、さらに併設された読書室での議論という目的は見当たらなかった。ボルドーの貸本屋が、実利的書物を店頭に並べ、教育的でかつ知的なものを補完する役割を担っていたのは、ボルドーがパリとは異なった文化、特性を持ち合わせた都市であったからであろう。

また、貸本屋の顧客としては、地図1で示された城壁の内部に住む人々が想定可能であり、城壁の外に住み、ブドウ栽培に従事する農民たちは顧客の対象としていないと考えられる。なぜなら、当時、農民たちに支払われる日当が約1フラン以下であったため、彼らが日当の3倍以上もする契約金を納めて、足しげく貸本屋に通うことは想定しにくいからである。さらに、前述の通り、貸本屋は金持ちが多く住む大通りに店を構えている。したがって、立地条件からは学生、研究者などの知的消費者、そして、書籍内容からは、聖職者、弁護士などの知的エリートだけでなく、幅広い階層の人々、とくに初等教育を受ける子どもたちやその親たちを顧客として推測できる。

ボルドーは18世紀に西インド諸島との貿易で黄金時代を迎えた。ワイン、砂糖、コーヒー、奴

隷なども扱い、中継貿易によって大いに潤い、多くの移入民が暮らし、湾岸貿易の国際的な商業拠点都市であった。商人のアソシアシオンや、ミュゼ・ド・ボルドー、アカデミー・ド・ボルドーなど知識人、政治家、商工業者、聖職者たちのアソシアシオンも発達していた<sup>13</sup>。商人たちは読み、書き、そろばんといった、最低限の実務教育に加え、文化的素養を持つことが必要とされていた。そのような都市空間において、ボルドーの貸本屋は、教会の小教区の教育施設の1つとして教育の一端を担い、ボルドーの商人文化の基盤を形成していたと言える。それは書籍内容が実利的なもの、教育的な内容を中心に展開されていることから推測できる。また、図書館の代替施設として、市民の知的欲求を満たし、成熟した商人文化を支え、補完する文化的役割も持っていたのである。

## 第2章 ボルドーの政治的指導者たちと貸本屋

本章では、ボルドーの政治を牽引する政治家、貴族、ブルジョア、商工業者、医師、弁護士、大学関係者など、ボルドーの知的、政治的指導者層が集った「アカデミー・ド・ボルドー」と、彼らを共通の利害によって結びつけたボルドーの自由主義思想について言及し、アカデミーと貸本屋の関係について論考する。

### 第1節 アカデミー・ド・ボルドーと自由主義思想

ボルドーの知的エリート集団と言え、貴族、聖職者、学校関係者などの知識人や、内科医、外科医、弁護士、その他有能な科学者らである。彼らは、アカデミー・ド・ボルドーという文化交流機関に集っていた。アカデミー・ド・ボルドーのメンバーは愛郷心に燃えた穏健な意見の持ち主で、科学的な方法と精神に関心を持つことを自分たちの特徴としていた。ボルドーの政治は、アカデミーに集う知識人によって牽引されていた<sup>14</sup>。

一方、ボルドーの商人たちは商業会議所に集っていた。商業会議所はボルドーの地域権力となり、自営の権利を保持していた。商業会議所のメンバーは、ボルドー社会における経済的、政治的な指導者となった。また、商人たちは、実務教育と教養の両方を身につけることを望まれており、彼らはミュゼ・ド・ボルドーという文化機関にも所属していた。ミュゼ・ド・ボルドーは、1783年に創設され、ボルドー商人たちの文化的活動の拠点であった<sup>15</sup>。

大革命の際に一時は廃止されたものの、1817年にアカデミー・ド・ボルドーが再建されると、貴族やエリート層のみならず、ボルドー商人たちがアカデミーの会員として集うようになった<sup>16</sup>。

<sup>13</sup> Charles Higounet, *Histoire de Bordeaux*, Toulouse, 1980, p. 201.

<sup>14</sup> *Ibid.*, p. 276.

<sup>15</sup> ギュイエンヌ商業会議所は、ミュゼ・ド・ボルドーの創設の際、「知識の向上及び、科学と文学の能力を磨くために貢献する機関であることを望む」と寄稿し、その設立を支持している。(Higounet, *op.cit.*, p. 263.)

<sup>16</sup> Michel Figeac, *Histoire des Bordelais, tome I, historique du sud-ouest*, 2002, p. 332.

そもそも、アカデミー・ド・ボルドーに属する高等法院貴族に代表されるような大地主のブドウ栽培家たちと、ミュゼ・ド・ボルドーに属する巨大な富を築いた船主や貿易商などの大ブルジョアである商業関係者の間には、経済上はもとより血縁上も密接なつながりがあった。ボルドーの支配者層には、通商上の利害が保持され、自らの経済活動の枠組みが脅かされない範囲内での穏和な自由主義的思想が共通して存在していた。ボルドーの地元貴族たち、商業関係者や政治家などの政治的指導者たち、そして海外からの貿易関係者たちの間には、血縁上のつながりに加え、共和主義的な自由主義思想を媒介とした交流もあったのである<sup>17</sup>。

歴史的に見ると、18世紀のボルドーの政治的自由主義は、絶対王政の専制政治と重商主義経済政策に反対し、立憲政治と資本主義経済を実現するブルジョア市民革命を担う思想の体系であった。ボルドーは、フランス革命の際に活躍した穏健共和派であるジロンド派の本拠地でもあり、自由主義思想をいち早くフランスに広めた。『法の精神』を記し、三権分立を唱えたモンテスキューを輩出した土地でもある。また、約400年もの間、イギリス領の自治区であり、自由主義の発達したイギリスと密接な関係を築いており、政治的な意味での自由主義が生まれる土壌があった。したがって、七月王政期のボルドーは、ボルドーの歴史的背景とボルドー政府の政治的動向がうまく融合した時期であったと言えるだろう。

一方、経済の領域では、18世紀以降の資本主義の発達によって自由競争の原理が確立され、封建的なギルドや重商主義的な経済統制に反対し、経済活動への自由な参加を促進しようとする動きがあった<sup>18</sup>。商業の自由主義は、外国との取引の多い商業都市ボルドーにとって有益に働き、経済的に発展するための条件であった。関税、輸出入の額、港湾通行料、入市税などを、ボルドー商人たちの有利になるよう自由に決定し、工業化を推進する国家の統制や規制を排除し、自由に競争することが可能で、商業関係者たちの利益を生み出すことができたのである<sup>19</sup>。たとえば、1846年には、ボルドーに自由貿易協会が設立されている。自由貿易協会は、商業会議所出身のデュベルジェ市長、経済学者パスチア、貿易商人たち、ベルサモン侯爵、モンテスキュー男爵ら地主貴族、司法者、代議員など、ボルドー商業関係者と県内土地所有者のエリートたちで構成されたメンバーで、彼らは自由貿易推進宣言を出し、フランスの自由主義思想を牽引する働きをしている<sup>20</sup>。商人たちの活動の場も多様化し、ブルジョアや聖職者、有識者などの集まりであったアカデミー・ド・ボルドーに商人たちが加わると、アカデミーは、商業関係者と貴族、知識人など

<sup>17</sup> *Ibid.*, p. 188.

<sup>18</sup> ボルドーにおける経済的自由主義運動は、1846年に大ブドウ園所有者で商業会議所のメンバーであるルクートル氏が、新聞への自由貿易主義的な主張を掲載し始めたのがきっかけである。その後、デュベルジェ市長が、『イギリスからの帰国時に行われた演説』というイギリス外遊後の演説を出版し、その後、マルトルが『ロバート・ピールと商業的自由』、ラ・グランジュが『飲料との関係における入市税一般についての考察』、ギュスターヴ・ブルネが『フランスとりわけボルドーの商業動向についての考察』『イギリス商船の進歩とフランス海運の状況』など次々に自由主義貿易に関する本を出版し、ボルドーの人々の興味をひいた。( *Ibid.*, p. 299.)

<sup>19</sup> たとえば、ナポレオン3世が1856年に経済改革大綱を出して自由貿易を推進したとき、ボルドーの指導者たちはナポレオン3世を評価し、ナポレオン3世に謝意を伝える上奏文のテキストが100を超える機関から発表され、ジロンド新聞に大きく掲載されている。

<sup>20</sup> 野村啓介「第二帝制下における国際商業都市ボルドーの自由主義—1860年前半期の運動について—」『西洋史学論集』(九州西洋史学会) 第38号、2000年、p. 26。

のエリート層が融合した形で発展した。アカデミーにおけるエリートたちの出会いは、商業的自由主義と政治的自由主義との融合を可能にし、ボルドー独自の新しい自由主義の体系を作り出し、その結果、ボルドーの成熟した文化が形成されたのである。では、次に、ボルドーの指導者たちが所属するアカデミーと貸本屋との関わりについて見ていくことにしよう。

## 第2節 アカデミーと貸本屋

アカデミーと貸本屋には、人脈と書籍内容の点で関連性がある。まず、人脈について、貸本屋とアカデミーの関係を見てみると、カタログ②の店主マダムクローゼは、「アカデミーは、彼女の教育者としての実績を重んじ、彼女の教育のための商売に勲章を贈った」と紹介されている。クローゼは、貸本屋を営む以前は小学校の教師であった。彼女の本屋には子ども向けの本を中心に、教訓物語や教育書が並べられており、店主の教育への熱意や興味が感じられる（表2を参照のこと）。教会の初等教育と貸本屋の関係については第3章で詳しく述べるが、クローゼの例が示すように、アカデミーと初等教育にも関係が見られるのであれば、初等教育を媒介として、教会とアカデミーにも何らかの関係性が構築されていた可能性を推測できる。さらに人脈について考察を進めると、営業認可という点で、貸本屋とアカデミーの関係性を認めることができる。たとえば、カタログ①の貸本屋が営業を行う際に提出された営業申請書の推薦人には、ベルサモン侯爵、モンテスキュー男爵、ペレグリオ・ロッシ、アドルフ・ブランキなどのアカデミーのメンバーが名を連ねているのである。カタログ④の貸本屋は、自由主義思想で結びついたボルドーの知的・政治的エリートたちが強く推薦した七月王政政権の規範に沿って本をセレクトしている本屋である。書籍内容を見てみると、自由貿易を推進した本を多く確認できる。また、これにより、貸本屋とアカデミー会員の間には人的つながりがあると結論付けることができるだろう。

次に、書籍目録を確認してみると、たとえばカタログ②のクローゼの貸本屋の書籍は、天文学・植物学・外国語・デッサン・寓話・地質学・体操・歴史・自然界の歴史・神学・文学・数学・物理・化学・道徳・音楽・神話・水泳・漁業・物理学・宗教学・弁論術・機械技術などに分類されている。これらは、アカデミーで実施されていた教養教育の科目と多くの点で共通である。アカデミーの教養教育科目は、宗教、フランス語、外国語、数学、物理、化学、機械工学、天文学、造船術、航海術、演劇、音楽などである。これにより、貸本屋がアカデミーの教養教育と共通の品ぞろえで営業していることが確認できるのである。

第2章では、貸本屋と政治の指導者たちとの関係について考察してきた。貸本屋のカタログ、営業許可申請書、アカデミーの教育内容などの資料を分析すると、アカデミーの教養科目と貸本屋の品ぞろえが一致していること、アカデミーの推薦を受けて貸本屋を営業していること、貸本屋の営業許可申請書の推薦人がアカデミー会員の政治家や商工業者であることなどが明らかになった。以上の点を勘案すると、ボルドーの貸本屋は、アカデミーに所属するエリートたちの文化活動を補完し、アカデミー出身の政治家たち活動に対して協力的であったと言える。

### 第3章 ボルドーの教会と貸本屋

本章では、第2章で見てきたような指導者や知的エリートだけではなく、ボルドーの幅広い社会階層の人々の生活に、貸本屋がどのように関わったのかについて、七月王政期のボルドー教会の初等教育をめぐる歴史的動向や、初等教育と貸本屋の関係において考察することにする。

#### 第1節 ボルドー教会の初等教育をめぐる政治的動向

フランス革命以降、革命政府は国民国家形成に向けて初等教育改革に着手し、なかば強引に改革を推し進めていった<sup>21</sup>。しかし、カトリック教会は、長年教会が担っていた初等教育への革命政府の介入を快く思っておらず、それはボルドーにおいても顕著に表れた。ボルドーは中央政府との距離を保ちつつ、イギリスとの関係を重視し、地方都市としての独自の発展をした都市である。18世紀以降は商業会議所やアカデミーなどによる教育基盤が形成され、自由主義的な気風が都市全体の思潮を作り出していたボルドーにとって、画一的で強権的な国家主体の教育活動を受け入れにくい土壌があったのである。そこで、次は、ボルドーの教会と自由主義との関わりについて述べ、そこに貸本屋がどのように関わったのかについて言及していこう。

フランス革命以前のボルドーでは、教会と政治は分離することが好まれていた。アカデミーや商業会議所は、教会が政治に介入することを嫌い、教会の動きには常に注意を払っていた。ボルドーは古くから政教分離の理念を持っており、人々は教会の政治的影響に対して警戒していた<sup>22</sup>。ところが、19世紀に入ると、ボルドーの政治的自由主義思想は、強権的なナポレオンの帝政に優位を奪われ、商業的にもボルドーの特徴であった自由主義貿易は1804年のナポレオンによる大陸封鎖令により規制され、衰退の一途をたどっていた。

そのような折、ブルジョアを中心とする自由主義者の内部には、公教育論者と教育の自由論者の対立が見られ、教育の自由の問題は、それまでの〈教会支配からの自由〉を内容とするものから、〈国家からの自由〉を内容とするものへとその重心を移動させていった<sup>23</sup>。それにともない、「自由主義的カトリシズム思想」という新しい潮流が生まれ、教会は革命により一度は失った権力を再び取り戻し、教会自身も、それまでの攻撃される側から、カトリック的自由論者へと徐々にその立場を変えていったのである<sup>24</sup>。

ボルドーのカトリック教会は、初等教育の権力保持を願っており、1826年から1836年まで大司教を務めたシュヴァリユー (Jean-Louis Ame Madelain Lefebre de Cheverur, 1768-1836) は、七月革命から出た権力に早くから加担し、カトリック的自由主義を前面に出し、教会による初等教育の

<sup>21</sup> Higounet, *op.cit.*, p. 279.

<sup>22</sup> *Ibid.*, p. 298.

<sup>23</sup> 荻路貴司「フランス王政復古期における初等教育をめぐる「教育の自由」について」、福島大学教育学部『紀要』42、1984年、p. 18。

<sup>24</sup> 柴田三雄ほか編『フランス史』、山川出版社、1995年、p. 284。

影響力の持続、増大を呼びかけた<sup>25</sup>。シュヴァリユーが積極的に働きかけた七月革命とは、ブルジョアの革命であった。七月革命の先駆者である政治家ギゾーは、自らが率いた政府を「中産階級の政府」とみなし、極めて穏健な自由主義的立場から、七月王政期の自由主義勢力と教権擁護勢力の対立構造を回避する方向で解決策を模索していた。ギゾーは、「教会と国家は教育に関して唯一の有力な勢力である。頼るべきは、この二大勢力の統合した圧倒的活動である<sup>26</sup>」との見解を出し、それまでは反目しあってきた初等教育に関し、自由主義勢力と教権擁護勢力、つまり、政府と教会の融合を試みたのである。

折しも、教会は、自由思想的カトリシズム思想と七月王政下の政策により、かつての権威を取り戻しつつある。そこで、ボルドーの政治家と商業会議所は、かつては政教分離を前提に、交わることのなかった教会と一時的かつ戦略的に同一の思想を持ち、互いに協力する体制を作り上げようと試みた。その結果、自由主義的思想を基礎として、政治、経済、宗教が融合し、自由主義的なボルドーの特質と世論を生み出し、そしてあまねく全ての階層に浸透していったのである。

歴史上、教会は純然たる宗教施設ではなく、政治や権力と密接な関係を持ってきた。上記のように、ボルドー教会も例外ではない。初等教育をめぐる教会の政治的動向と貸本屋との関連性を探してみると、先にも述べたが、カタログ④に、「七月王政の規範に沿って、本を分類、選択している」との記載が認められる。前述の通り、ボルドーのカトリック教会は、七月王政を歓迎し、国家と協力して初等教育推進にあたっている。つまり、ボルドーの貸本屋は教会の小教区の教育施設として初等教育を補完するだけでなく、政治的な意図をも保持しながら営業しているのである。これは、パリの貸本屋が反体制的世論の発現の場としての可能性を有していたことと比較すると、明らかな違いを認めることができるのである。次に、第2節では、初等教育をめぐるボルドーの教会と貸本屋について考察することで、知的エリートや政治的指導者以外の顧客と貸本屋の関係を明らかにし、都市における貸本屋の新たな機能を提示したい。

## 第2節 初等教育をめぐるボルドーの教会と貸本屋

交通網の形成や工業化の波及は、ボルドーのような地方中核都市を中心とした広域経済圏を発展させ、それらを結びつける全国市場も形成された。しかし、フランスの文化的な標準化というと非常に困難で、とりわけ言語の多元性は、均質的文化空間の実現には程遠い状況であった<sup>27</sup>。「単一にして不可分なる」フランス国民国家形成のためにも、多くの地方言語を母語とする多文化分立状態の言語状況を改善し、文化統合を行うことが急がれた。とくに、大衆文化を形成する

<sup>25</sup> Higoumet, *op.cit.*, p. 280.

<sup>26</sup> 小山勉「フランス近代国家形成における学校の制度化と国民統一—七月王政・第二帝制期を中心に」、九州大学『紀要』、1996年、p. 300。

<sup>27</sup> フランス革命以前のフランス語（オイル語）の範囲は、パリを中心とした限られた地域にすぎず、南仏（オック語）、ブルターニュ地方（ケルト語）、アルザス（ゲルマン語）、バスク地方（バスク語）のみならず、北フランスにおいても、方言間の差異は大きかった。

上で重要な役割を果たす初等教育の国家統制は急務であった。しかしながら、19世紀の半ばを過ぎても、いぜんとして体系的な民衆教育は確立しておらず、完全に義務教育が成立したのは1880年代の第三共和制が安定してからである<sup>28</sup>。というのも、フランス革命の後、第一帝政、王政復古、七月王政ともに、初等教育は教会に委ねられたため、19世紀なかばの初等教育の多くは教区司祭や修道聖職者たちの独占的な支配下にあったからである。教会は地域文化の担い手であり、子どもたちは地方の教会の特性に沿って言語、文化、歴史、宗教などを含む初等教育を受けた<sup>29</sup>。

ボルドーは南フランスの地方拠点都市の一つであり、オック語を用いて生活する地域に位置している<sup>30</sup>。ボルドーでは、教会を中心に地方独自の文化が形成され保持されてきた。初等教育義務化が徹底するまでは、ボルドーの初等教育は、教会と教会の小教区の教育施設である貸本屋によって担われていたのである。そこで、次は、貸本屋がどのように初等教育と関わったのか、具体的にカタログやパンフレットを見ていくことにしよう。

貸本屋のカタログを見てみると、カタログ①の貸本屋では、ノート、メモ帳、羽ペン、鉛筆、定規、たて笛など、とくに初等教育で使用されていた学用品の販売がなされている。営業目的にも「信仰心のある本屋である。教育施設に分類される。小教区の全ての信者にご利用いただきたい」などの記載を認める。これは、貸本屋と教会や初等教育との関係性を明確に示したものである。また、カタログ②の貸本屋では、子ども向けの本のコーナーが常設されており、それらの書籍を紹介する際、「子どもの時は男女の区別をせず、楽しいもの、教訓物語を提供することになっている」と記載してある。教訓物語は、当時、教会の初等教育で多用されたものであり、これらの教訓物語を店頭に並べるのは、教会の初等教育を引き継ぐものである。カタログを見ると、貸本屋が、ボルドーに住む子どもたちやその親を顧客対象にしていることが推測できる。つまり、ボルドーの貸本屋は教会の小教区における教育施設の一つとして、初等教育を通じて民衆と教会を結びつけたのである。教会は、初等教育における特権を保持するため、自由主義思想を利用しながら自らの教育機能の役割を実用化、多様化させるのに貸本屋を利用している。したがって、貸本屋は、ボルドーの特徴ある文化の形成に重要な役割を果たしたのである。

ボルドーの自由闊達な気質を作り上げた自由主義思想は、経済的自由主義が政治的自由主義に先行する形で形成され、最終的には、広く一般市民にいたるまで発展し、ボルドーの自由闊達な世論を形成していた。先に、「ボルドーには文学や自然科学の世界と実務知識が融合し、多彩で、窮屈さを感じさせない独特の商人文化があり、そこに教会の影響力が加わってボルドー独自の文化が形成された」と書いた。これらは単に自由主義思想と片づけられるものではなく、商業、政治、宗教的な影響に加え、ボルドーの歴史的特性も混ざり合って、複合的に形成されたものである。

<sup>28</sup> 清水徹、根本長兵衛編、『フランス』、新潮社、1993年、p. 268。

<sup>29</sup> 教会と初等教育の関係、小さな学校に関しては、天野知恵子著『子どもと学校の世紀』（岩波書店、2007年）に詳しい記載がある。

<sup>30</sup> 福井憲彦編『フランス史』（山川出版社、2001年、p. 342）によると、ボルドーは、第二帝制期にもフランス語以外の地方言語を話す都市として紹介されている。

もちろん、このボルドーの特徴的な文化は、アカデミーがその基盤を持つ。しかし、貸本屋は教会とアカデミー双方とつながりを持ち、両者を相互に補完する役割を担っている。貸本屋は、アカデミーに属するエリートたちによって形成された自由主義的な思想を教会の宗教的世界と結びつけた。それは、今回、対象とした全ての貸本屋が、自由主義思想の書籍と聖書や教会関連の本の両方を店頭に並べていたことから明らかである。さらに、ボルドーの貸本屋は、教会の小教区における初等教育の補完施設として、ボルドー市内に住む子どもたちやその親たちに、実利的かつ教育的な書物を媒介として自由主義思想を伝播した。それにより、自由闊達なボルドーの商人文化、さらには自由主義思想を基盤とした特徴ある都市空間が成立したのである。

## おわりに

これまで見てきたように、ボルドーの自由闊達な商人文化は自由主義思想を基盤としている。政治を牽引する知的エリートたちは、自由主義を媒介として政治的、商業的、宗教的に、それぞれに利害を持って結びつき、ボルドー独自の文化と社会を形成していた。そのような都市空間の中であって、ボルドーの貸本屋は、図書館の代わりとして市民の文化的生活を支える教育の代替施設であり、教会の小教区の文化施設として初等教育の一端を担っている。つまり、貸本屋はボルドー社会における初等教育の補完者である。

また、政治的指導者たちの思潮を形成する上で、アカデミー・ド・ボルドーの果たした役割は大きい。そのアカデミーと貸本屋の間には重要な関係性が見られる。たとえば、貸本屋の店主はアカデミーの関係者が務め、貸本屋の書籍目録とアカデミーの教養科目には共通性が見られ、貸本屋の営業申請書の推薦人にはアカデミー会員が名を連ね、さらに、アカデミーの会員であるボルドーの指導者たちが強く推薦した七月王政権の規範に沿って、貸本屋は本をセレクトして店頭に並べている。これにより、貸本屋はボルドーの知的エリートたちの文化活動を補完し、政治家たちの活動に対する協力者であると考えることができる。これは、パリの貸本屋が、18世紀のカフェの機能を踏襲し、文化の発信拠点かつ公論の形成の場であり、反体制的世論が形成される政治文化的公共性を内包していたことと比較すると、明らかな違いを認める<sup>31</sup>。

一方、ボルドーの貸本屋は体制順応型であると言える。教会との関係においては市民の初等教育の補完者として、政治的指導者たちとの関係においては政治的な協力者としてボルドーの都市社会の中に位置づけられる。ボルドーの貸本屋は、体制の枠組みを保持するための世論を形成し、その世論を伝播している。コントロールされた情報は危険性を含まない。したがって、ボルドーの貸本屋は、ボルドーの政治的指導者たちの、市民に対する教育宣伝部門であり、自由主義思想

<sup>31</sup> 18世紀のカフェと文芸的公共圏については、寺田元一著『編集知の世紀』（日本評論社、2003年）の第一章「市民的公共圏—サロン・カフェ・劇場—」に詳しい記載がある。



を啓蒙するための補完施設とも言い換えられる。しかし、保守的かつ啓蒙的という限定的な枠内ではあるが、七月王政期のボルドーの貸本屋は、指導者とボルドー市民とを知的書物を媒介として結びつけ、都市空間の啓蒙に、極めて肯定的、積極的な役割を果たしている。したがって、七月王政期のボルドーの貸本屋は、都市空間における知の受容と伝播の拠点であると言えるだろう。

本研究では、顧客リストが現存していないことから、貸本屋の顧客である読者について積極的な議論ができなかった。中産階級の女性たちが余暇を利用し、貸本屋に足しげく訪れては「危険な読書」<sup>32</sup>をし、その結果、身を滅ぼしていくというテーマは、19世紀のフランス小説でも頻繁に取り上げられているため、貸本屋と中産階級の女性たちの関係についても研究の余地を残している。19世紀のフランスにおける印刷、出版、読書、読者をめぐる体系的な考察は、筆者の今後の課題としたい。

(研究紀要編集部は、編集発行規程第5条に基づき、本原稿の査読を論文審査委員会に依頼し、本原稿を本誌に掲載可とする判定を受理する。2011年5月9日付)

---

<sup>32</sup> 中産階級の女性たちが行った危険な読書に関しては、宮下志朗著『読書の首都パリ』(みすず書房、1998年)、『本を読むデモクラシー』(刀水書房、2008年)にいくつかの記載がある。また、イギリス、フランスの中産階級の女性たちの読書を比較した研究として、拙稿『『ボヴァリー夫人』をめぐる比較文学的一考察』(『人間文化研究』、No.10、2008年12月)を参照されたい。